

---

# 逆輸入の男

チリドック

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

逆輸入の男

### 【著者名】

NZマーク

【作者名】  
チリドック

### 【あらすじ】

数年ぶりに尊敬した兄と再会すべくカフェで待ち合わせ。しかし兄は、あまりにも変わっていて妹はある決断を下す。

六年ぶりにニューヨークから帰ってきた兄を、

駅から徒歩5分のところにあるカフェで待つていると、

突然どこか見覚えのある顔をした男が向かいの席に座った。

紫色の花柄ポロシャツを白いパンツにきっちんとしまい

赤いリュックを隣の席に大切そうに置いてぽつちやりしたその男は呟いた。

「久しぶり。元気?」

肩を微妙に弛緩させて、微笑む男。

んー・・・お、おおー

じーっと、凝視しながら頭の中でぽんと手を叩いて、男に人差し指を向けて私は思わず尋ねた。

「えっと、ひょっとしておにい?」

(なんだこれは? 今アメリカではやりの悪戯か!?)

「なにを言つてんだよみほ。他に誰だよ、あんまり変わつてねえだ

ろ?..」

はははは、と乾いた笑みを浮かべながらテーブルに近づいてきた  
ウエイトレスにホットコーヒーと告げてから、運ばれてきた水を  
一口飲む。

その動作が不思議と長く感じられて、脂汗が背中を駆けたのがかな  
り気持ちが悪かった。

(腹が出でるじゃねえかよ)

胸中で咳きながら、必死に笑顔を作る。

「あはは、『めん』めん。3年ぶりだからかな、なんか雰囲気が変  
わったね」

「ええ！？ そう？ いひひひひひひ

肩を上下に動かし、おしゃぼりで額を拭う。

(こんな脂性じゅなかつたよね。しかも海外滞在年数も違つじ)

私は用件迅速に棲ませようと、本題を振った。

「んで、わざわざ呼んでどうしたの？ 父さん母さん待ってるから  
早くしてよ」

「おお、やだった！ と、頷いて兄はリュックから数枚の写真を  
取りだして私に渡した。

見ると、そこには緑色の長い髪をした目の大きい女の子が様々

な衣装とアングルで写っていた。

しかもすべてファイギュア・・・シマウマパンツって何だよ（滝

汗）

・・・・・

頑張つて全部見てみたけど、

・・・・・

ぐしゃつ！

（あつ・・・・）

気が付くと、私は写真をぐしゃぐしゃに丸めていた。力をこめすぎてがちがちに固まるくらい魂こめて。

兄が私の肩を叩き制止してようやく我に返った。

「ど、どうした!? 救急車呼ぶ?」

「い、ごめん大丈夫・・・うん大丈夫」

ハアハア、肩で息をしながら水を飲んで息を整える。

恨みがましい目つきで兄を見たが、本人はケロリと不思議そうな顔をしてこちらを観察している。

落ち着くと、私はこめかみを指先でさすりながら口を開く。

「なによこれ？」

「ひつひちやん、いま向こうで熱いんだよ！」

いやオレはマジ驚いたね！ ジャパンアニメマジで世界征服して  
るんだぜ！」

ところで… 頼みは他でもない。

これのコスプレしてくれよ？ お前さんしかいねえんだ…！」

お前さんのボディーで外人部隊を駆逐するのだ…！」

「…・・・・・ヘー」

不意に、窓の外の景色を私は眺めた。昔の風景が脳裏に流れる。

高層ビル30Fの洒落たレストランに久しぶりに再会した兄妹。

（かつて…・瘦せていて筋肉ムキムキ無精髭がワイルドオーラ満  
載で

マジに惚れられたセフレに刺されてもくじけなかつた兄。

外人に喧嘩売ると言つて単身アメリカへ…・そして6年ぶりの  
再会）

「あ、そうだニュー・ヨーク土産買つてきたによによ！」

若干背筋がぞわつとしだが、恥ずかしながら私は現金なもので、

横目で兄がリュックをあわる姿をちらり見ていたりする。

おそらくこの瞬間が一番兄との幸せな時間だったのだと私はしばらく思つことになる。

兄が満面の笑みで、私に手渡したのは金色の包装紙に

包まれていて片手で持てるくらいの大ささだつた。

「ありがと、開けていい？」

「うん、どうぞ。貴重品だから大事にね」

「うん」

・・・・・　包装紙を開けた。

思考停止約2秒

そこには、先ほどのキャラクターと同じような作風のカードの束があった。

具体的に一部を言えれば、ピンク髪で巨乳な露出女、

10歳以下の少女が修道服を着て涙目で指をくわえているそんなものが50枚ほど。

「なにこれ・・・カードダス?」

「うん、ぴっぴカードダス」いつしかで出回つていかないアイテムで  
さて、妹のおぬしにこの秘宝を授けよつ

持つ手をよく見ると脳が浮いていた。

眞付き合つていた男のベットから見覚えのないパンツを見つけたときと同じくらいの嫌悪感。

一応、断言しておぐが。そういうのが好きな人たちを軽蔑とかする気は毛頭ない。

それは個性だし、色々な価値観があつて善いと思つ。

でも・・・でも。

プレゼントを渡す相手の好みくらい考えて渡せと、価値観を押しつけるなと私は兄に叫びたかった。

が、顔を上げて兄を見た瞬間その気は消える。

ブウウウン・・・ブウウウン

自分の眉間に皺が寄りまくつていると、分かつた。

田の前で行われている行為に、思わず顔をテーブルに

叩き付けて失神してしまいたい衝動に駆られる。

兄は、鼻歌交じりに平然と髭を剃っていたのだ。

ちらにその合間に脇の匂いが気になるのかしつこく脇に鼻を近づけて嗅ぐ。

周囲から押し殺したような笑い声が聞こえてくる。店員は困ったようにこちらを凝視していた。

そんな視線や音をそれこそまるでぐの坊のように気にせずこ作業を続ける。

私が顔を真っ赤にしてずっと向かいの鈍感男を睨め付けているとようやく気づいたのか口を開いた。

「どうした？ そんな口ふくらまして見つめてきて。オレ妹属性じやないって言ってなかつたつけ？」

(もつ・・・いいだろ・・・もつ!?)

私は勢いよく立ち上ると反動で倒れた椅子を持ち上げ叫ぶ。

「問答無用であたしたち一族の前から消えろおおーーー！」

バキッ！ーーー！ ガシャアアアン！-

この日、初めて私は身内を半殺しにした。

E  
N  
D

(後書き)

けつしてオタさんを馬鹿にしているわけではありません。  
あくまでネタなので^ ^ ;『氣を悪くしたひ』みんなさい。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1599z/>

---

逆輸入の男

2011年12月5日20時29分発行